圖解

量地指南後編

四

洋学文庫
文庫8
C 299
7

量地指南後篇卷之四

勢南處士 村井昌弘編述

算勘術

算勘之辨

算數家の地理を量ること。序例ハ述るまゝ。嚴密巨細なるもとハ。尤宜しとすべし。去ども迂遠ハて急速の要用ハなし。器物繁多ハて勞煩なり。是に因て輿地家の取ざる処勿論なりといへども。數ハ萬物の根元。又吾量地の不捨術なれバ人ら其大畧を述て左ふ記す

器械之制

算術家の町見其術少きゆへ。器械の品も又多かゝ。其理ハ量地家の器物に拘しといへども。其支ハ大ふ異なり故ふ量

41-7702

地者流といへども其制作を辨知ずんばあるべからず。茲をもつて其大畧を左に摸して参考に便とす

地板の制長サ三尺五寸。厚サ一寸。幅一尺二寸以上に制る。板の両端の手前に釘穴と一つ宛明けあり。是ハ釘をさし。水縄をとゝのへためなり

界引板の制檜の節なし。柾目の板なり。板悪くれば界引狂て引かゝれなり。板の長サ四尺厚サ五分。幅一尺ばかり四方ともに矩に合せて直に剤りて用るなり

間竿の制長サ六尺あり。て。樫にて制る。一尺ごとの所に墨を以て印とする。方一寸二三分と節とに

表木の制ハ木にても竹にても正直にして少も斜曲なきを用ひ長九尺で二本。五尺で二本なり。木にて造らば太サ方一寸二分計り。竹ならば三寸四五分廻りに成とす

水縄の制ハ苧糸を三つ斜に合せて制するなり。又ハ大鷹の繊を用ひべし。長さハ二十間許り。又一尺五寸ごとの縄四筋にしかるべし

樋定規の制木ハ朴木をもつてす。軽くなるは。長サ六尺一本。長サ二尺五寸一本。大小二本あるべし。樋の深サ一寸二三分。幅一分計りもべし

常定規の制木ハ檜か樫か用ひ。長サ六尺一本。三尺一本。大小二本あるべし。尺寸に盛付ること勿論なり

短矩三寸矩なり加路土ともいふの制真鍮又ハ鯨鬚を以て制る。曲尺の三寸なるものなり。是を渾発に代て用ひ。長三寸と一町とさゞめ五分と十間とす。是にて界引の線を量るなり。渾発の理に

違こなり

右器械大畧量地家の器物に準じて知るべし。煩しきを省く。猶此外渾発磁石小道具等あるとも通例其圖を省く。

なるハ記さず

町見術名

平町見と云ハ　平陸を量る方也遠近同術也

上り町見と云ハ　山岳を量る方也高低同術也

下り町見と云ハ　谿谷を量る方也淺深同術也

向町見と云ハ　彼面を量る方也廣狹同術也

右四件を四町見と云

高を知ると云ハ　高低を知る方也

繪圖町見と云ハ　城圖を作る方也

乱面町見と云ハ　混雑の品を量る方也

物陰町見と云ハ　物を隔て量る方也

地形高下と云ハ　地形の高低を知る方也

四町見辨

算數家の町見術ハ。平町見上町見下町見向町見といふこと有。是を算家にて。町見の父母とす。尤故あるも量地家といへども。其揆一なり。然ども算家の術ハ迂遠にして急速ふ用ひ為さず。量地家の術ハ徑捷にして即席の要を相成る。其得失同日の談ハ非ず。其外町見の名ある名目多くなりといへども。時に臨て術名となるものなれば。一定の法なし。故に四町見の外。まだ幾記さず。都て量地家ハおのゝ數者の術を用ひ。ものゝ定まりとして。今初學者勘考の為に

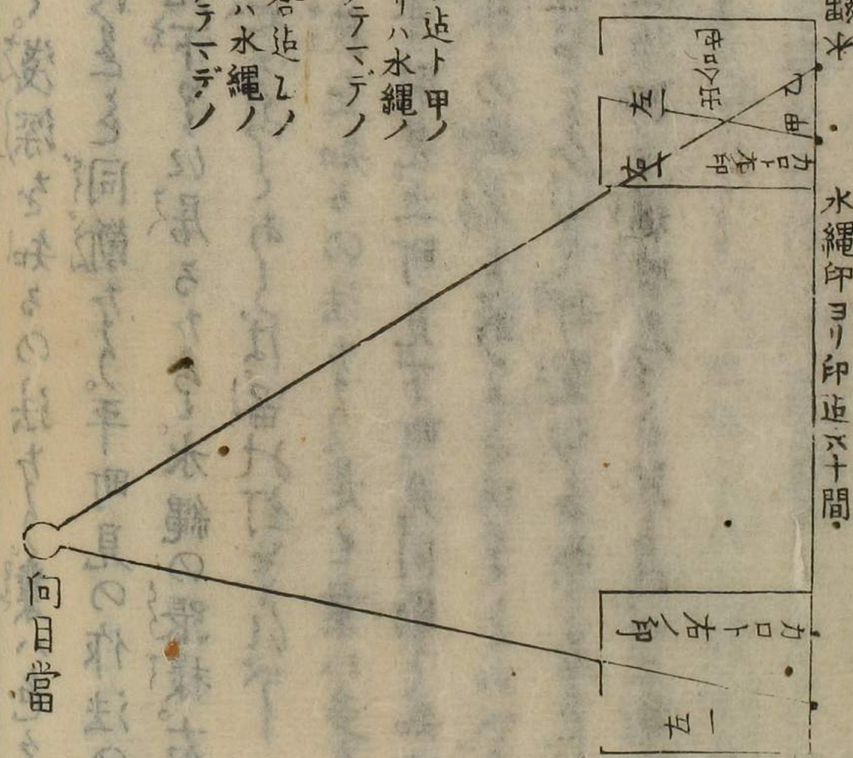
姑く。唯四町見の法を茲ょ記す

平町見といふは。遠近を考ふの法なり。業をいろくいろ
とゝを其術作法を皆同じ。まづ地板を居て隨分直を
極めゝ地板乃両端の穴より針ゝ。此針ょ水縄
さまたけて。地板より五分上げゝ水縄と張なり
左方にて釘二寸計を隔て水縄ょ印を付け。此印より
右の方ハ三尺隔て又印を付るなり水縄ハ六尺ま。一丈
ともなりて若ゝかゝしゞ。みぐりうれ手廻れあり。
上り町見といふは。高低を知るの法なり。業ハ品々いろ
てを其術作法ハいづれを同断なり。平町見の作法ふ
同じ。但ゝ高サ一尺ぐらいに塁をゝ。其上ょ地板を
置たるを

下り町見といふは。浅深を知るの法なり。業ハ色々に
て。其術作法ハいづれを同断なり。平町見の作法のご
とくして。地板を先下ゝに居るなり。水縄の張様。右同
断なり。板下ゝて辺ゝあらば。留め釘をさしべ
同町見といふハ。廣狭を知るの法なり。是も業ハ多くし
て。其術作法も。平町見。上町見。下町見同断と知べし
右に述るゝ。此外の術名をあまたいへども
何をも此四術の理をもつて。押究むるなるべ辨
ぐりに移よぐべ。但ゝ聊か通暁さるもの。二術と後
ふ掲ぐ見るべゝ

平町見之圖

遠近術也

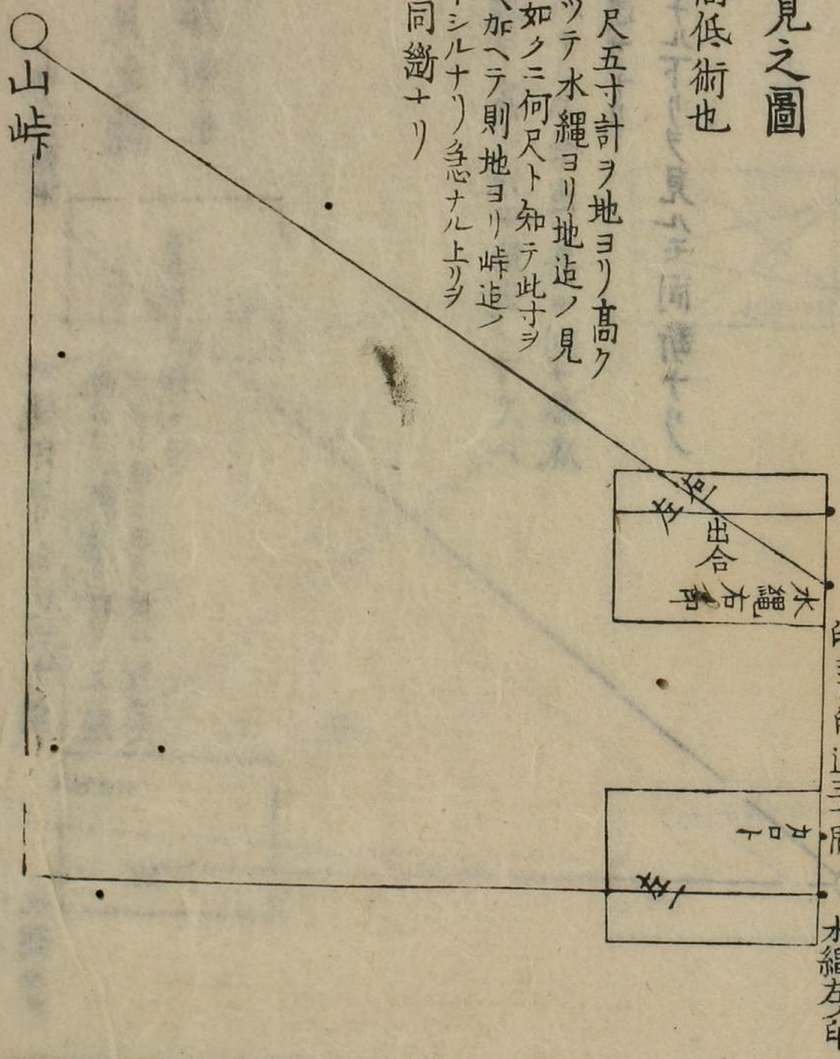


短矩左ノ印ヨリ出合迄ト甲ノ通リ筭ヘ計ル此遠サハ水縄ノ左ノ印ヨリ向ノ目アテヽデノ遠サナリ

短矩右ノ印ヨリ出合迄乙ノ通リ筭ヘ分ル此遠サハ水縄ノ右ノ印ヨリ向ノ目アテヽデノ遠サナリ

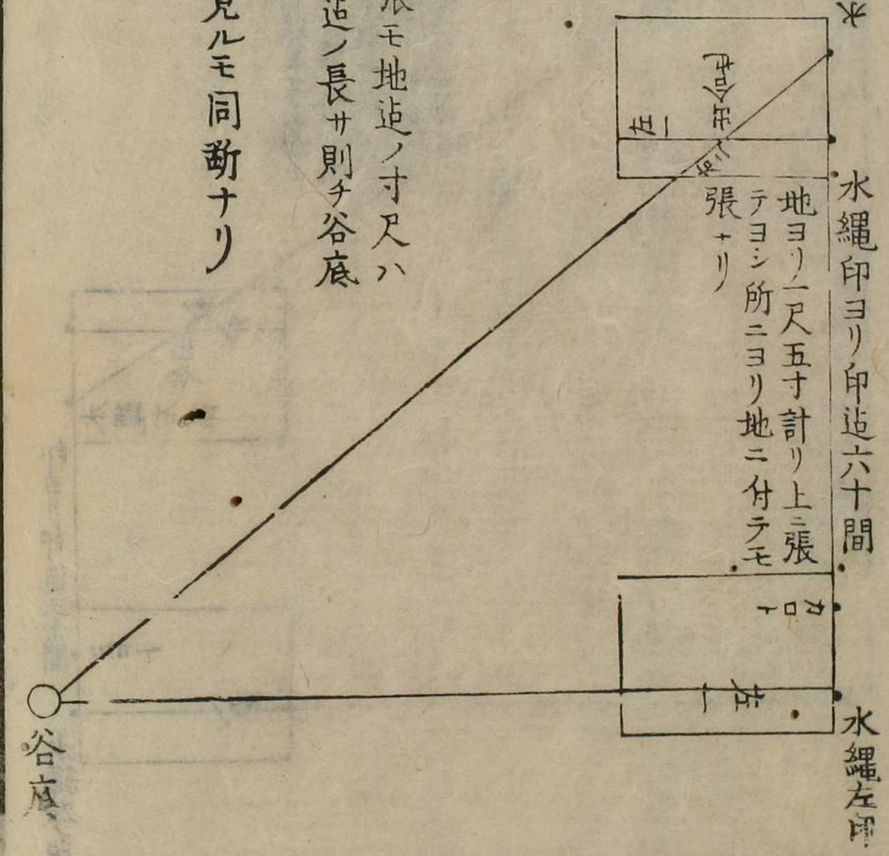
三町見之圖

高低術也



水縄一尺五寸計ヲ地ヨリ高ク張ニヨツテ水縄ヨリ地迄ノ見通弦ノ如クニ何尺ト知テ此寸ヲ出合ヘ加ヘテ則地ヨリ峠迄ノ遠サトシルナリ急ナル上リヲ見ルモ同斷ナリ

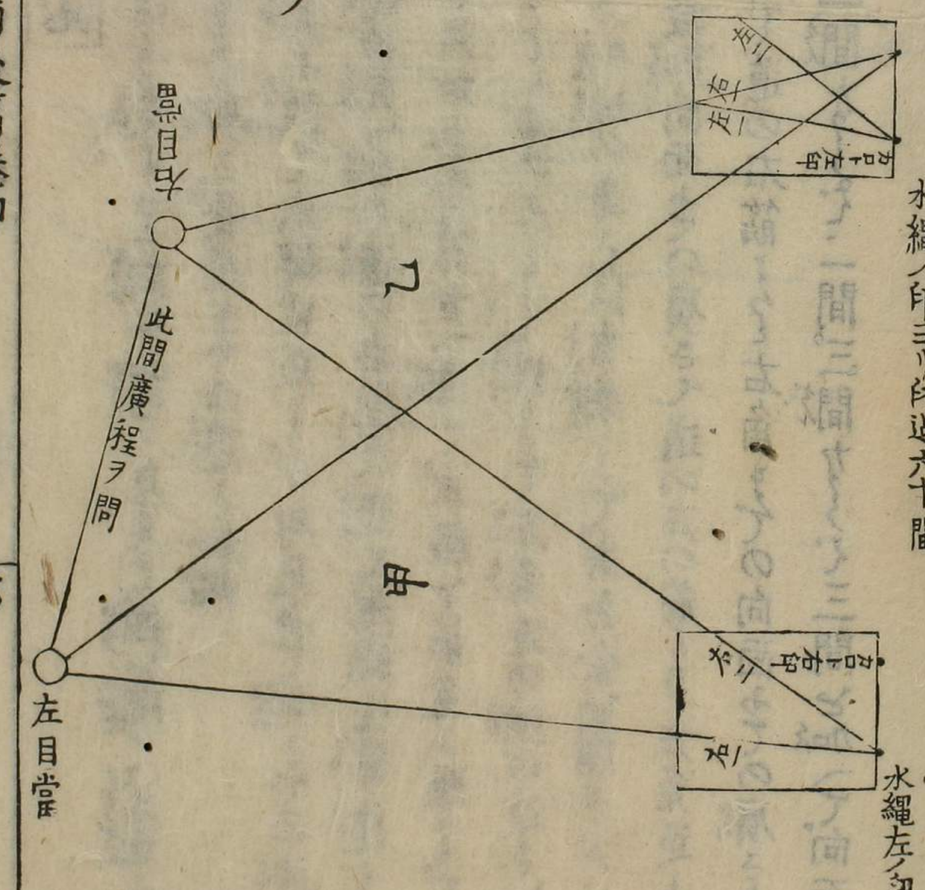
下町見之圖
淺深術也



水縄ヲ高ク張モ地迄ノ寸尺ハ不入ナリ出合迄ノ長サ則チ谷底ヘノ遠サナリ

急ナル下リヲ見ルモ同断ナリ

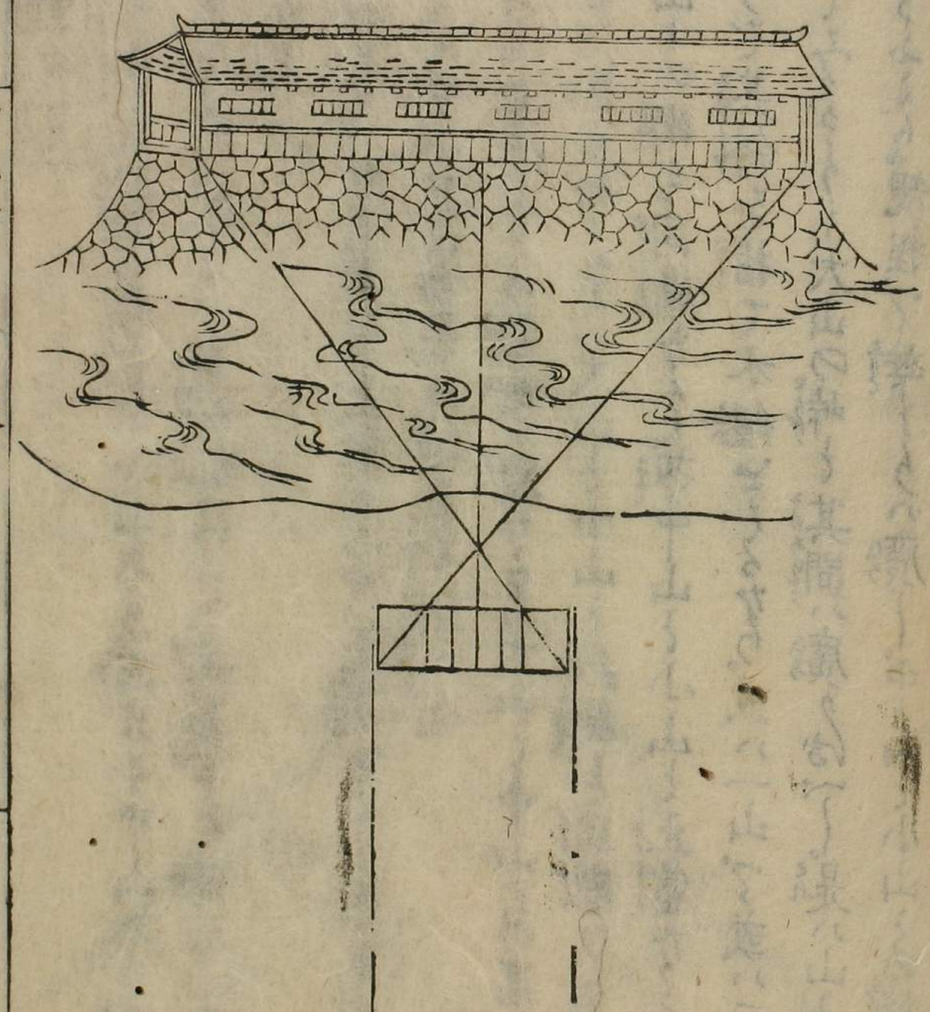
向町見之圖
廣狹術也



廣遠二術町見

或人問曰。細道にて。是を向を望こと見るとて。垣を隔て正面ふ長屋あり。其長屋の廣さ。長屋までの遠さ如何

術曰先狹き間尺ふ隨て水縄を張る。平町見あて向までの遠さと知る。扨細道の先へ出て道の右の方へ添て水縄を筋違ふ張る。左迫の遠さ知る。又左の方へ添て。水縄を筋違ふ張る。右角迫遠さ知る。こゝ右のごとくして。然して左角迫の弦の遠さと自乗して。其内の向迫の遠さ自乗して。去を余と開平方に開き。倍こして此数即向面あての廣さ。道の左の筋より左角迫也右方も同術ふて。道の右筋より右角までの向面あての廣さ也是に細道の幅二間なれば二間。三間なれば三間を加へて向面の廣さなり

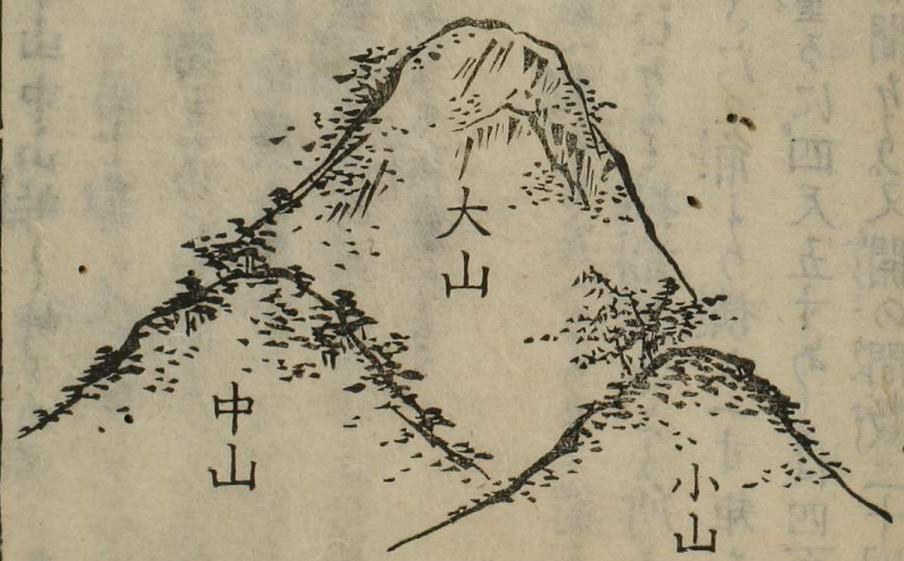


乱面町見

或人問曰向面ふ。右方に小山あり。左方ふ中山あり。正中に大山にうつりがくれ〻〻目的乱にして。其高下と彼三山間の経地幾千

術曰先上り町見。平町見。向面の町見。高をもる町見四色を以て。大中小三山の高さ遠さ各知之也

扨大山と中山との間地ハ股なり。大山と中山との高下ハ勾也。然るバ弦も知るなり。大山と小山とハ術を同断なり。中山と小山との術も同断なり。扨中山と小山と正当なるバ。斜曲あるゝ其斜を指て水縄とするなり。或ハ一山ゞ或ハ二山ゞ分てみるべし。大山の峠と其間ハ廣しおゝ。是ハ山ゝハ登斜あるゝふゝり。規程ゞ〻ハ廣し。中山と小山との麓の間ハ狭きものなり。小山の麓にて山の西方と向面町見あゝ見る時ハ麓ハ指渡の径知るなり。麓の幅廣くして。麓の真中と麓の外端とハ間を知ゞなり。別の山を同断。然るハ山々の下径と知て。半して勾股ふ用て其山の高さ弦勾股ふ用て弦ハ知るなり。弦とハ山の登斜規のことゝ。小山中山麓とその廣さ弦。甲と名付く。中山の下の半径と小山の下の半径と

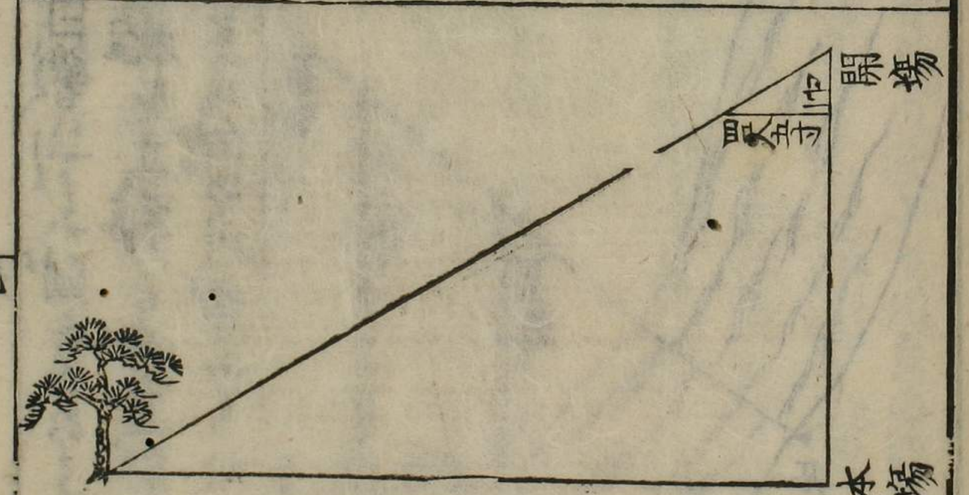


和して是へ甲を加へ〻の數ハ小山中山峠と峠との廣さも別の山も同斷然まども小山中山同じ高さ〻れも右の〻〻中山假令バ小山より五十間も高くぐ此五十間際迫の廣さ〻知るぐ〻。但上まぐの廣さ乗と和して開平方ふ開て此數則中山の峠より小山の峠迫の弦にての廣さあり別の山あても同意なり

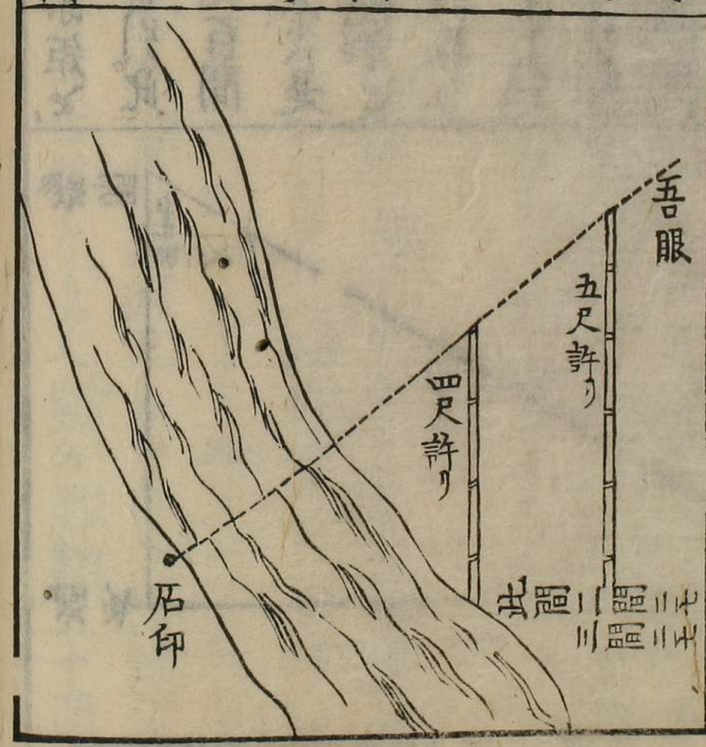
知遠近

術曰先正面の目的を見込右へ成とも左へ成とも開さて又其所より目的を見こむなり。扨始見込る所より十間脇へ開さたるゝ其開さたる角より横ゑ一寸矩を差出し其矩すて竪の筋を量るに四尺五寸あるゝば四百五十間なり五尺あるゝは五百間なり又開の間數二十間

なるゝば二寸の所すて横ふ矩を出し其端より竪ふ筋を引此條を量るふ九尺あるゝバ九百間又一丈あるゝ千間なり余ハ是をもつて考べし何時も彼方を此方へ引きつけて見る心あり横ゑ開くこと成るゝとろ竪に進退して見るべし其理規矩術と違さてなし遠近廣狭高低淺深をけるゝさて是又同然なり故ゑ是を贅せず



又遠近是移こゝろ。術曰譬ハ下ふ圖ちるおく。川幅を見るふ。川の前ふ四尺許の杖を立。夫より二三間も退き。吾目より少し下ゐ。又杖を立。向の川岸ゐも心印をもて。二杖の杖と心印と三所ふ見て極ゑ若見通不揃ゑ手前の杖我目下ノ杖ナリ進退して三所眺合ゑふ立。扨杖と杖との間。三間ゐ。先の杖を左へ動ゑ。其身ハ動ゑして杖ゑを立かへ。又杖と杖との間三間



みして。試合所の川原ふ印と付。先の杖より川向の心印まで間數程川の廣と知る。杖を立替見ろこゝハ。田規を廻す理ゑり但川端こゝ一間わゑ前ふ先の杖を立ゑば間數を内一間引殘ゑ川の廣さこゝ巻ふ。杖の抄眺合セ。見へ兼ゑ。末に横竹を結び付。其竹の上より見通してよ。

又術曰杖を中眺ゑ鉄炮打の手前のおく持て。其杖の抄を向の川端へ見通し杖の抄上げ下げして向の川端の目付所を眺合ず尤杖を持る手前動ゑぬやうに我身を田規ろして脱へ開ろ。此方の川原へ見後し。其杖の抄の目的まゝ間數ゑゑ。川乃廣さこと知る

又術曰川堀等を隔て遠程を其場ふ臨。紙を疊て勾股弦の形を制し。是を以て杖ゑ持添杖と勾と矩ゑ合ず則弦を正面の水の上

岸へ見通し。其杖と紙とを少も離さずして。左右へなりとも。後へなりとも見移し。其弦の尽る所まで。陸地にて歩數をもつて間尺を極め。假令ば百五寸跬あらば三跬を一間の積にして五十間なり。是即向正面求る所までの遠程なり

又遠程を量るに。此方より彼方を見るに。假令ハ吾前に六尺の棹を立。夫より又一丈進んで五尺九寸の棹を立向の目的と。二本の棹と三所一致ふ。眺合する。然して一分を一尺の割ゆく。前の棹六尺。先の五尺九寸を等して遠さ六十丈と知ふなり。或ハ先の棹二寸短くして眺合ふとれハ。遠さ三十丈あり。或ハ三寸短くして眺合ふ時ハ。遠さ二十丈なり。又三尺短くして眺合ふ時ハ。遠さ二丈なり。是皆此方より彼方へ求る所の遠程と知ふべし

其理顕然たるゆ故に其図を省略するなり

又術に曰吾前ふ六尺の竿を立夫より二尺先まで四尺の竿を立て。是と眺合ふ時ハ。遠さ六尺と知るべし。又一丈先に四尺の竿を立て。是と眺合ふとれハ。遠さ三丈あり。又一丈五尺先まで四尺の竿と眺合ふとれハ。遠さ四丈五尺と知るなり。凡て三倍に見る。此心ふて五倍ふなりとも。十倍ふなりとも。乃至百倍ふなりとも。竿の長さと。畠地の宜しきと。極め次第にて間數丈數遠近ある也

或問山の遠程と直立と。二品を一同に量ること如何

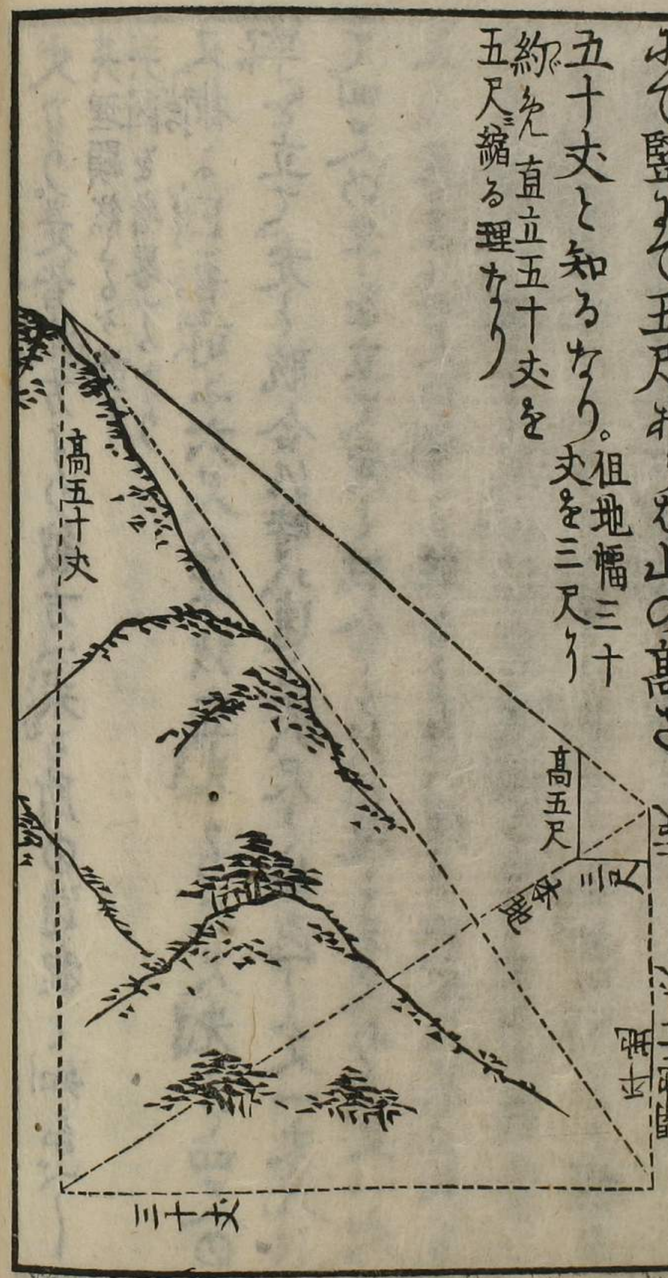
術曰本惕に於て。彼方の山を此方より曲尺ふ合セ。三角に見通し

三角ふ見通すこと則術次に述べし

其見通しふる形の動ざるやうに假

令ハ右の方横(真矩に二十丈開くて見通し)ゝ又始の如く其所にて二尺の曲尺を出し〳〵。是も矩の手ふ合せ見るふ下まく三尺あれば地幅の遠さ。三十丈と知る。又其所ゆて竪まて五尺あるゝ。山の高さ五十丈と知るなり。但地幅三十丈を三尺縮る理なり

約ゑ直立五十丈を

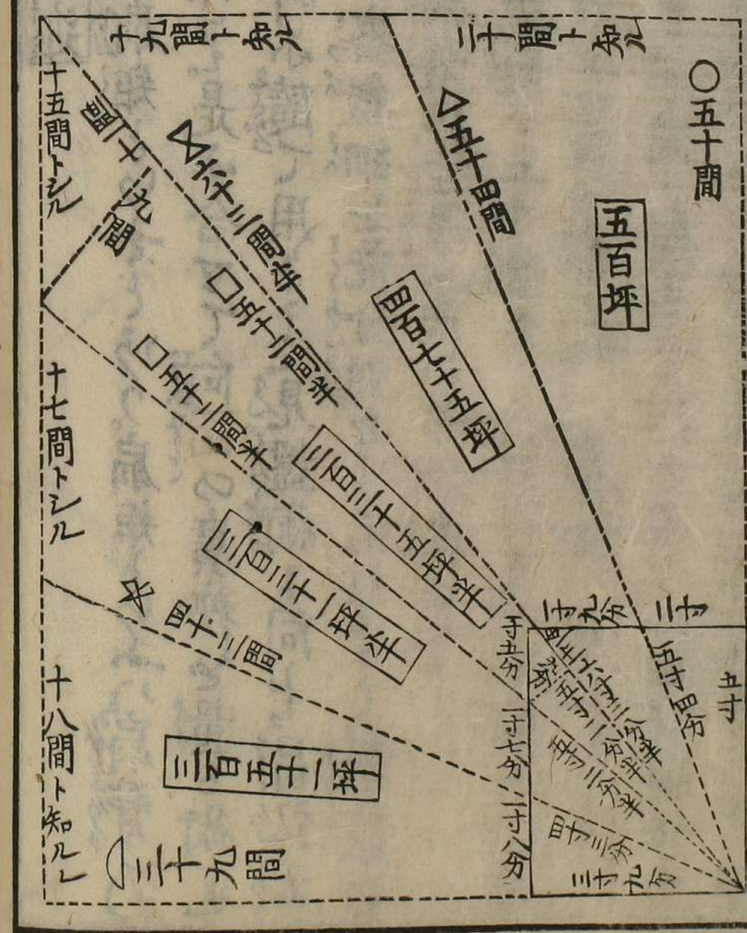


知廣狹並遠近

廣狹を知るふ扇矩といふ。扇骨乃ごとくに圖を作る。是ふ合せて向面の廣狹を量る術也尤彼方の正斜ふ隨て用ること。見盤術ふ同じ。昌弘云かゝのごとくに纖密微細を能分別なるもしること。數家の常はて規矩術者の企及ぶ所ふあらず察すべし

其法ふ曰○の方遠さ五十間あり△の方五十四間ある時圖面にて○の方五寸四分量る剌て其両方相去ること二寸あゝで。向の廣さ二十間と知る。又△の方五十四間▽の方六十三間半ある時。圖面ゆて△の方五寸四分▽の方六寸三分半量り剌て其両方手前ゆて相去ること。一寸九分あらば向の廣さ十九間と知る。又□の方両方ともに遠さ五十二間半ゞ

あり。圖面ゟ右のごとく五寸二分半宛量ゟ剌ゟ。其両方相去ること九分あゝて向の廣さ九間と知る。又夫ゟ向ゆて三角の場あり。是も圖面ゟ横ゝ左一寸一分。右一寸五分。廣さ九分あり。故法の如く。一分一間の積ゟ。左方十一間。右方十五間。徑廣さ九間と知る又□の方五十二間半☆の方



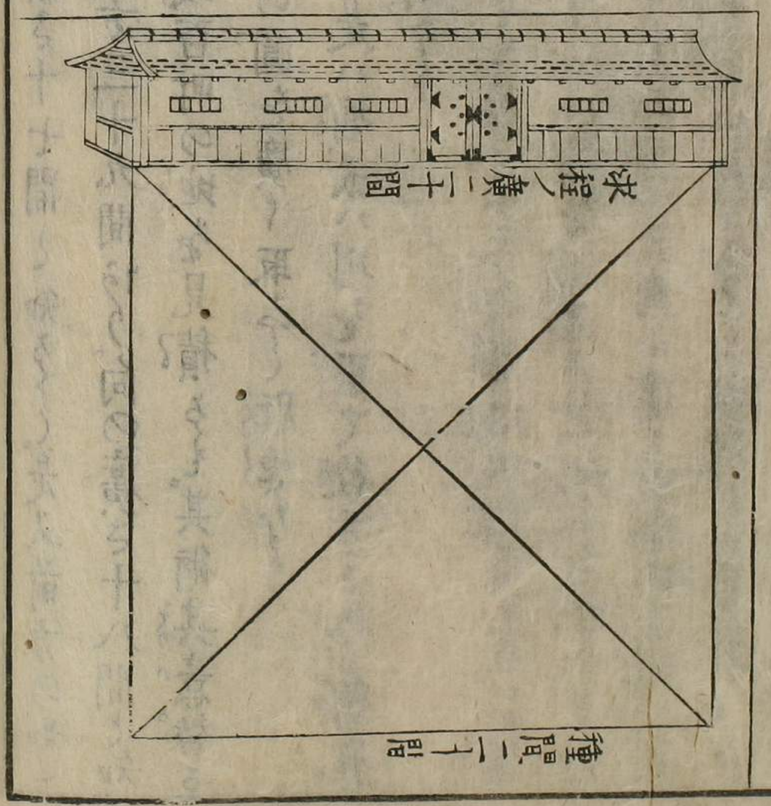
四十三間あり。向の廣さ十七間と知るゝ。是又前方の如し又☆の方四十三間。○の方三十九間ゟ。向の廣さ十八間と知を同前なり。幾十町。幾百町の地を見積るも。其術其意替ることなし。遠町程手前の圖を廣く取ること肝要なり

又廣狹を量る法あり。是ハ堀。或ハ川を隔て彼方よゝある櫓屏土手石垣等を量る術なり

術曰其場ゟ臨て杖にても扇にても。又ハ鼻紙の類にても。三角形を用ゆ先目的の右の方の端を正直ゟ見込。又目的の左の端ゟ見通し。扨其ゟ左の方へ正向ゟ進て目的の左端の正當ゟ至ること。右方にて見込たるごとく彼所ゟ目的の左右を三角ゟ見渡すなり。如此して此方の左右の間數十五間あれば。目的の廣さも十五間なり。二十間あるゝ目的

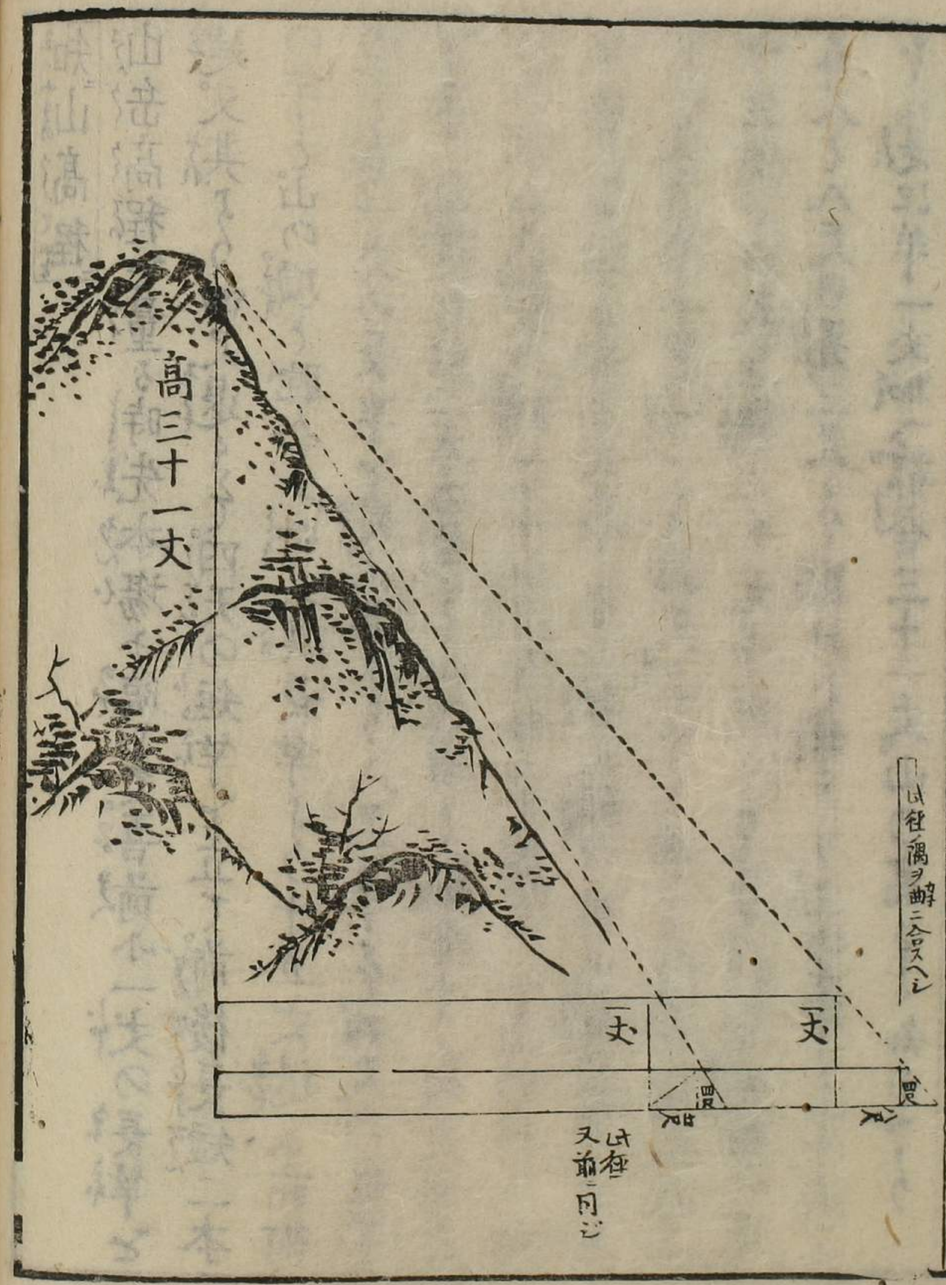
の廣さも二十間なり圖を見て詳ふをべし

私ふ云算勘術ふ廣狹を量る法如何ぞを書記たまども畢竟同理同術なる故くりかへ煩しくなれど省て載ず



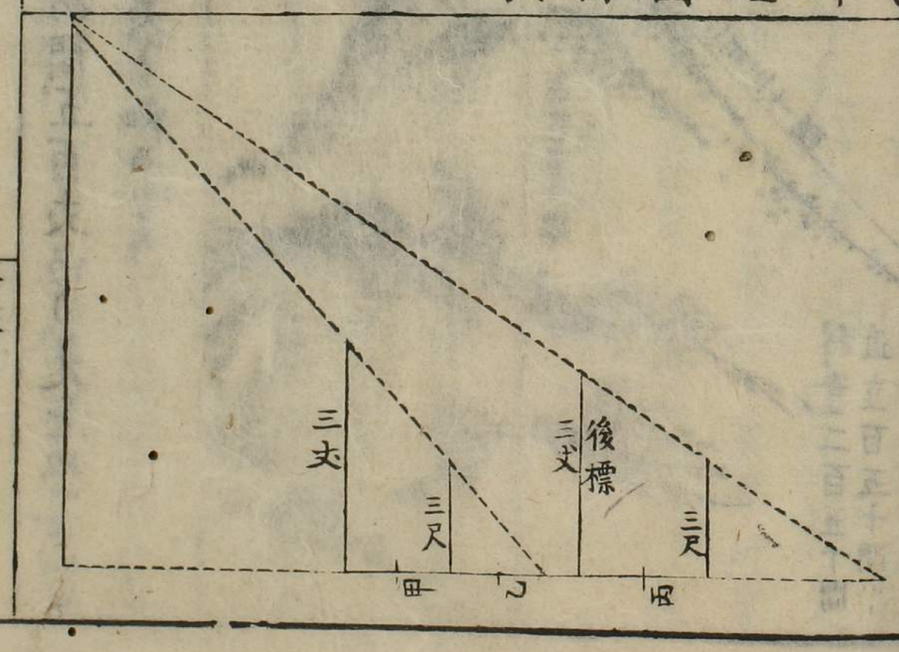
知山高程

山岳高程を量る時先本場ふ臨ゝて吾前ふ一丈の長竿を建又其より四尺退ゝて四天の短竿を立て前後長短二本の竿と山の頂と睨合ふ時又其長竿より十五丈退ゝて前術のごゝ一丈の長竿を建又其より八尺退ゝて四尺乃短竿を立て前後長短二本の竿と山の頂と睨合ふとゝ是直立の高程あり扨其詳なるを知らゞ長竿一丈の内ふ短竿四尺を引ゝ去り六尺となり扨又始の退ゝ後の退ゝ五尺と八尺の退ゝ差ゆ下より四尺上ふ高さ見通す心ゝ故ふ十五丈ふ六尺を乘じて九十丈となるゝ初後の退五尺と八尺の差三尺ゝて除けゞ竿より上の高さ三十丈となる是に竿一丈加へ都合三十一丈山の高さゝ知るなり



又術曰長さ三丈の標木と長さ三尺の標木と二本宛を以て計るなり。圖のごとく長竿の内短竿を去て二丈七尺を丁とし圖の乙と相乗じて實とし圖の丙の内甲を去て余二丈を法として以て實を除て前の竿の長を加へ高さなり。別ふ甲乙相乗を法をもつて除て遠さなり。

假令ハ前ふ竿を立て短竿を退て去ること六十丈甲とし後ふ竿を立て短竿を退て去ること六十二

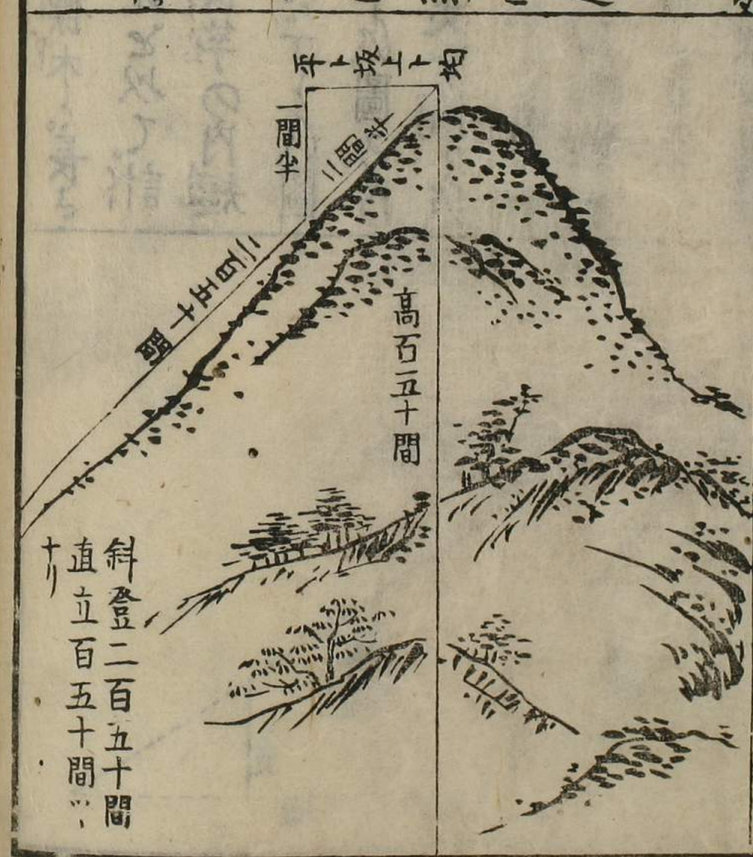


丈丙とに前の短標と後標との間五百丈なり是を以て高さ六百七十八丈遠さ一萬五千丈と知るなり

又山岳の直立を知る術を問

答曰山上より平地迄斜の間數を別術を以て兼て量て知て然て後直立を知る也

平陸より山頂までの斜登の間數を量て知る術は前件に詳なり



術曰豫め別術を以て量て知る山下より山頂まで斜の間數たとへば二百五十間あるとれば山頂に至て本場を定めそれより二間半の竿を圖のごとく斜に差出し其竿の下端に又別に直立の竿を立させ此竿二間なれば直立二百間此竿一間半なれば直立百五十間と知るべし

知物高

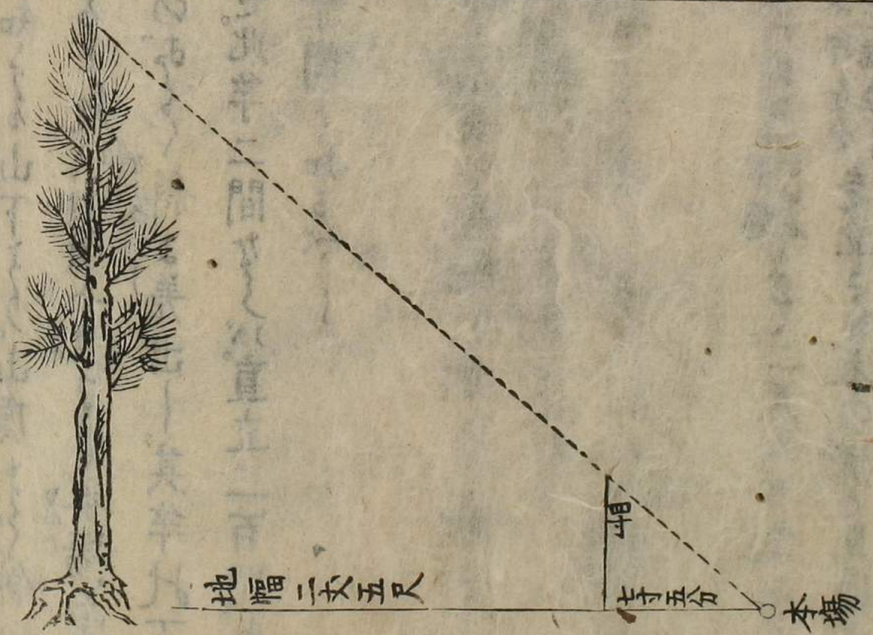
知物高とは知木高とも山岳の高程を量るも畢竟は一術なれども筭家は其術名を別ければ爰に其例を記す

或問曰今此所より向方木の根まで遠さ二丈五尺なり彼立木の高さを知るの術如何

答曰術曰地幅二丈五尺あるべし此所本場とまて二尺五寸先みて五六尺の竿竿長短く見通の所に印を付て短く勿論長さ竿と継て を立させ木の梢と見通と

三所一平ふ見渡す。此竿即木の高さなり。但二尺五寸の所すて。竿五尺うわ〻で木の高五丈と知る。又二尺五寸の所にて。五尺五寸あ〻で。木の高五丈五尺と知る

又云木の根まで二丈五尺ある時。其所ふ一丈の竿を立。又五尺退く。竿の端と木の抄と三所既合せ。地より四尺上ふ目をあて見通す積りて。竿の高を六尺とて相去る二丈五尺を



乗して後ふ退く。五尺を除けで。竿より上の高さ三丈と知る

竿一丈加へ。木の高さ四丈と知るなり

又別術云。晴天の時。木の日影地ふ移るとゆくで。一尺の矩ろ扇う是を以て量る。其矩ゆくも扇ゆくも。一尺の物。日陰八寸あ〻で。八寸の矩ゆく量るハ二丈五尺あり。則木の高と知る。或ハ矩扇一尺の物の影一尺二寸あ〻で。一尺二寸矩すて量る。此心を以て竿ゆくも知るなり

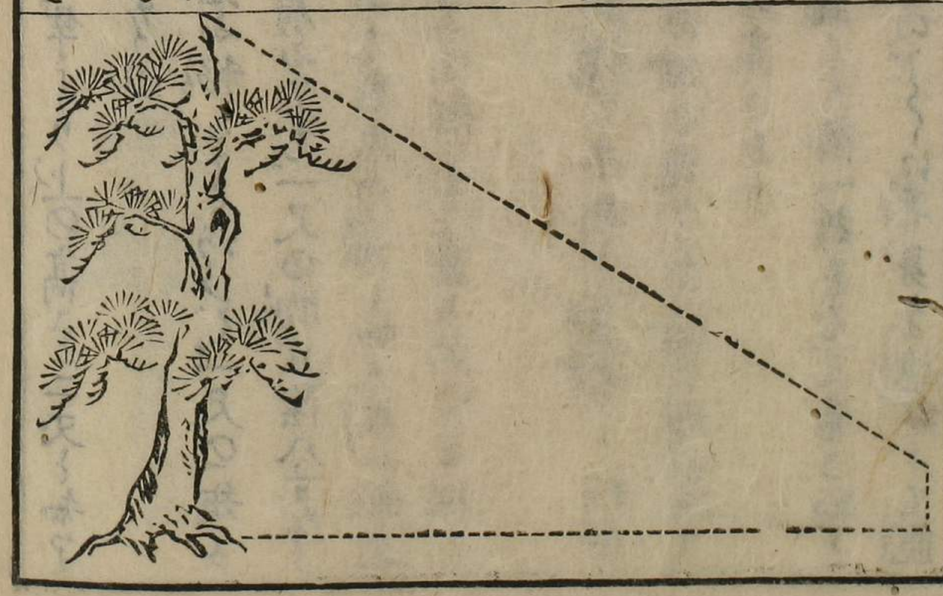
又別術云。吾目通ふ杖を向上てふ持て木抄と吾拳と杖端と三所一平ふ見渡し。扨其杖を木の根の通てゆて横へ打かへ杖端ゆあ〻る所まで間數かで。木の高さなり

又別術云。紙を四角ふ折て。又其隅〻隅へ折まで。三角の物となる。是を我手ふ持て。木抄と既金のごとくに。吾身を進退して能

合所ふ止る。此所より木の根まて即木の高さなり。四方になて見る心なり。勿論又是ふ居長三尺を加つゝ木の高と知る

或問曰向正面ふ堀を隔て櫓ふり此方より彼方の櫓の下まで。平町見を以て量るふ。遠さ五町あり。此櫓の窓までの高さ如何

術云前表と後表とと。右の堀の手前ふて陸地ふ立て。右の櫓の窓と弦ふ見通して。則二表の間の地徑の尺と以て。前表の尺の長を除て得數と



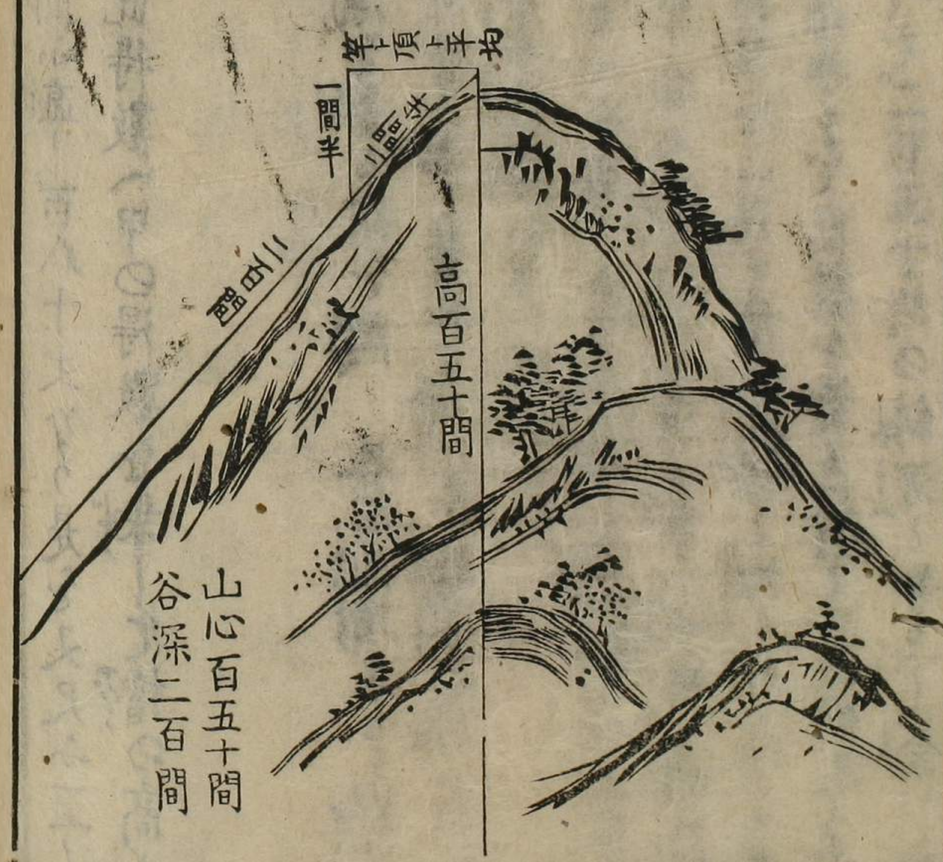
甲ゝ。五町を間ふ直ゝ。百八十丈なり。是を又尺ふ直ゝ千八百尺なり。此得數ゝ甲の得數を乗ゝて櫓の高と知るなり

知谷深

或人谿谷の斜深を量る術を問。答曰山頂より山軸迄直立の間數。別術ふて兼て量知る。然ゝて後谷の深さ知なり。別術の作法を前章ふ見へたり

術曰兼て別術を以て量る知る山頂より。山軸まで。直立の間數。たゝ。百五十間ある時ハ。先山頂ふ至り。本場を極め。扨其所より一間半の竿を山頂と竿ゝ上端と均くなる所ふ。直立に立させ。其竿の木まで。間數を量るにたゝ。二間あゝ。二百間。二間半ゝ。二百五十間の斜深と知べし。余ハ家

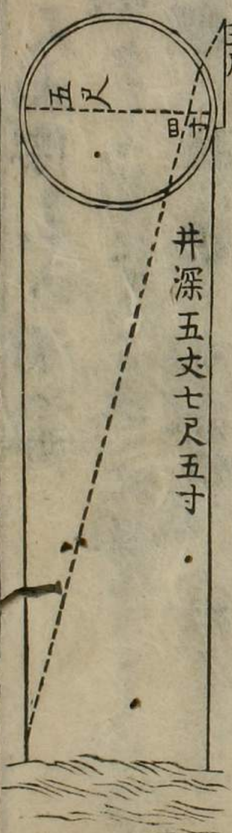
れは働は私は云算勘術に谷の深さを知法如何程も書記したれども畢竟同理同術なるを以て煩はしくれば省て載ず覧者術のすくなきを訝るなかれ



量井深

或問曰茲に水井あり。口径五尺。深底とそこ。今其水面迄の深底幾千　答曰深さ五丈七尺五寸なり

術曰新ふ井幹に添て棹を杖にても。正直に立て。其末より。又假に六七尺の弦ふなるべきものを差出し。此頭を杖の頭と水面の向と弦ふ見通し。其立る股の本五尺の本を量とば。十二半なり。十二半八六丈二尺五寸なり。此内假ふ立なる五尺の棹を引で。機五丈七尺五寸なり。棹杖八四也



股也井径八三也

勾也假物八五也

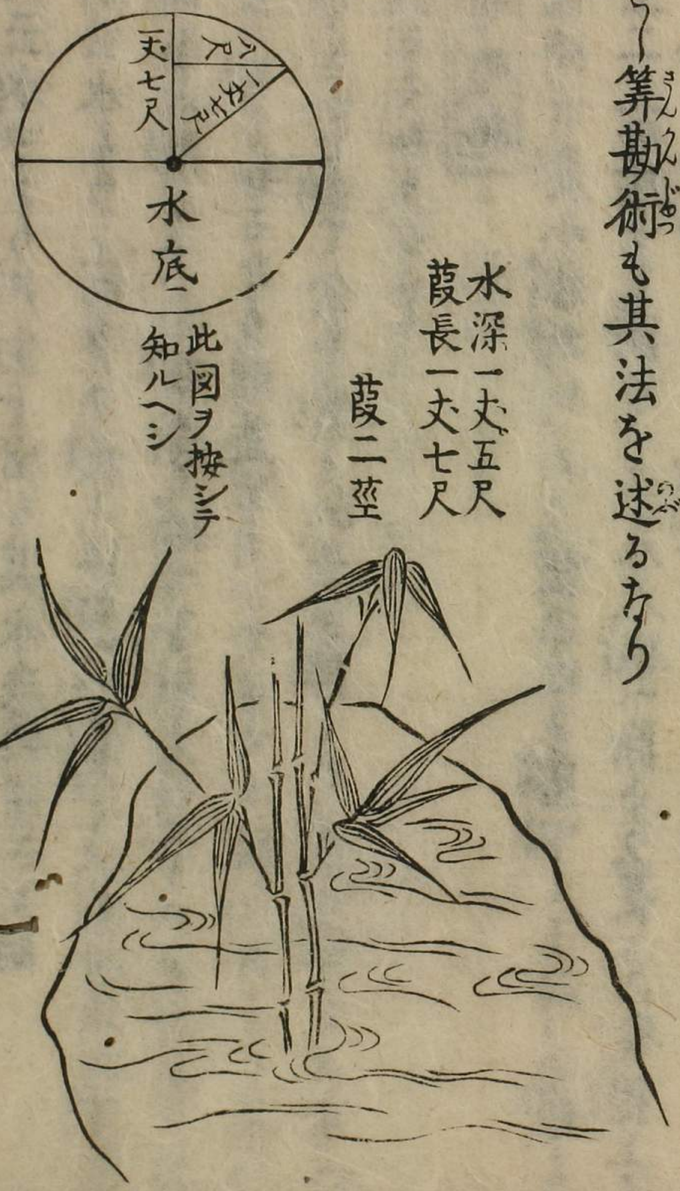
弦也

又問曰水井径四尺。水際までの深さを問
術曰井戸がハよ杖ゐても。竿にても立て。此杖の下より。假ふ
勾を出し。此勾の頭と杖の頭と水崖の向と弦よ見通し
則杖の長さ丈以て。勾の長さ丈除きて勾配を。是をもつて
井の径を除きて深さ丈知るなり

知水深

或問曰池中ふ葭二本。根を連絡並びて生ず。水底の深
さハ知るべし。水面よ出る所二尺あり。水底までの深
さ幾ぞ
答曰水面より池底まで一丈五尺。葭の長ハ一丈七尺なり
術曰葭二本の内一本の稍を斜よ引撓て。水面と除る
ハ初直立の所を除き。隔ること八尺あり。扨圖の如く。二尺

と八尺とを。二寸と八寸ふ縮めて圖し。是を渾発をもつて
規円にして量るときハ。其水面より池底まで一丈五尺。也
葭の長さ。一丈七尺と速ふ知るなり。是ハ機轉の術なり
る〻算勘術も其法を述るなり



又云水中より芦生ず出る其水底の深さと問
術云水より上の芦の長さ弦勾の差なり則出所の芦の
頭を水際まで引撓めて此寸を股とし土より水際迄芦の
長ハ勾と知るなり則差を自しして子ち股を自しく其内
にて子を去て余を實とし差を陪して實を除て水底の
深さと知るなり

折竹術

或問云爰ふ雪折竹あり梢の地へ落下ること竹の根より
上二尺の所すて圖のごとく八尺股へ除ふり長さハ幾程と問
又折ると全竹の長さハ幾程と問
答曰根より折目まで一丈七尺也折目より梢も一丈七尺也
術ハ池中葭の法と同じ

又問右ふ所謂竹の折目半なる積
なり折目若梢の方短き時ハ如何
答曰折目梢短き時ハ竹の根へ引
付ける心持すて假令ハ根より一尺
上ふあるとハ一尺上より前術の如く
して後ふ一尺加へ知るなり
又問折目梢の方長き時ハ如何
答曰折目梢の方長き時ハ根より下ふ圖
するごとく折目より下の竪を股と
四とし折目より梢の地ふ下る所を弦とし五とし根より梢
のあさる所の間地を鈎とし三とし圖のごとく鈎六尺ある時
ハ其隅の六すの所すて矩よ合セ剸盤の法のごとく切て

ゝ〻むるとぶ股八寸と。弦九寸八分なり。是を十双倍して。股八尺弦九尺八寸。鈎六尺と知るなり

委ハ圖を考ふべし

量流物

或人問云爰ふ長流水あり。水上ふ泛ふ木葉あつて流る。一昼ふ道程何程流るといふ　答曰三千三百七十五間

術ふ曰流る木の葉。呼吸一息ふ三間づゝ流る積りて。呼吸昼夜一萬三千五百息といふ。是ふ三間を乗ずれば。四万今五百間となる。是を廿二昼ふ除すれば。一時三千三百七十五間ふあるなり

量行程

今旅行の人あり。大器一日の行程何程と問

答曰一呼吸の間ふ三間ゆく歩むなれば。九里十三町半なり

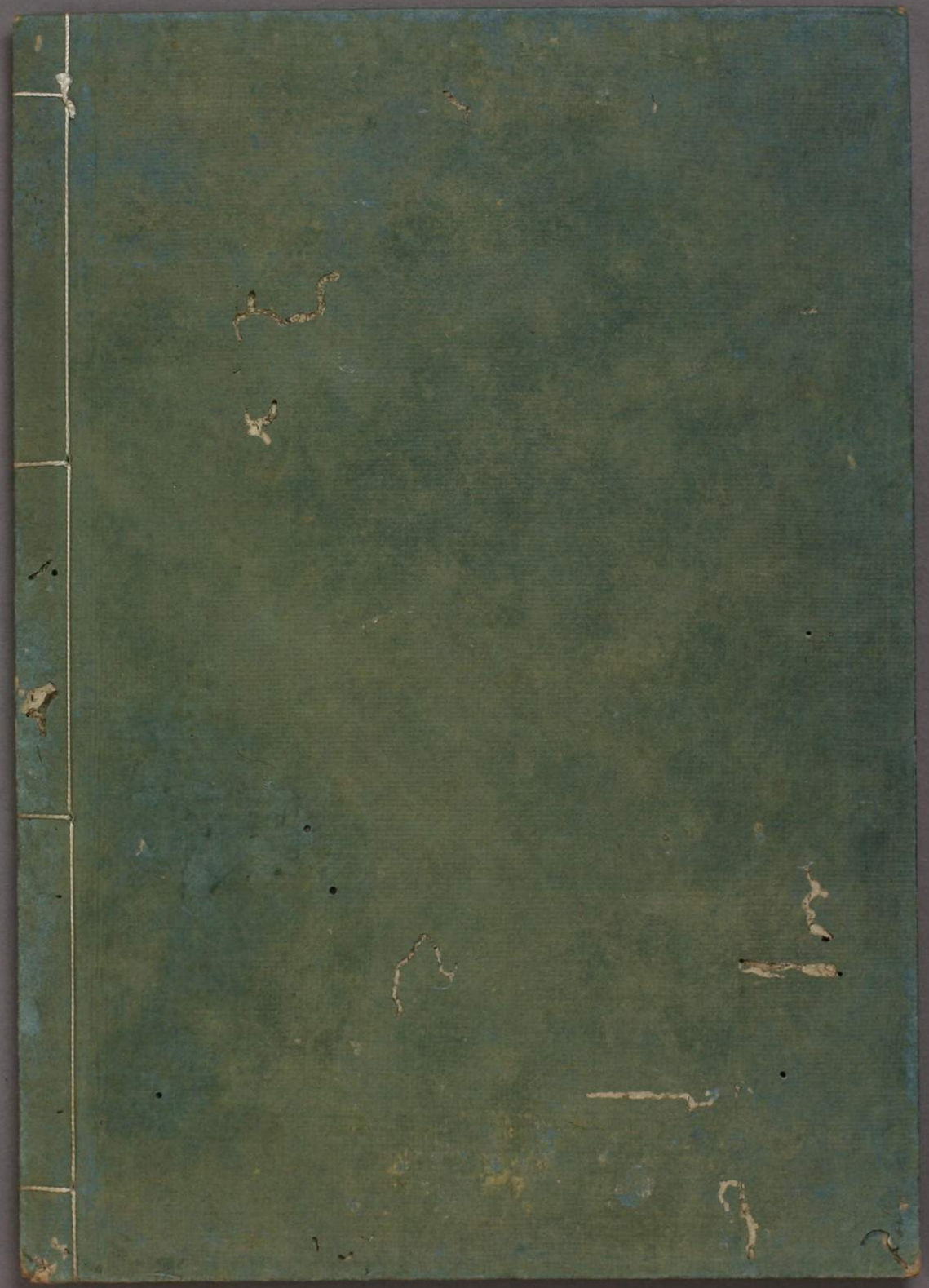
術曰呼吸一日一夜ふ一萬三千五百息と云。是を昼夜ふ折半して。一日六昼の呼吸六千七百五十息なり。是ふ三間を乗して二万零二百五十間となる。是を一町六十間を以て除けば三百三十七町半となる。是を一里の町三十六町を以て除て九里十三町半と知るなり

量而高下

今左右両所ふ火見櫓あり。其高下を量る術如何と云

術曰手前の敷居上より向の敷居上を先上とし。先下りを疾と先見極るなり。樋定木の上を塞ぐ。定木を横ふして。樋の内より見てゝ。先上とすれば高しと知る也。上と

町見まく則向の高さを知る。平町見まて向の遠さを知る。
ぶれなり。先下まるまゝで下町見まて見通の弦を知て甲
乙を向の敷居より上に目付をまて。平町見まて遠さを知
て。股なり乙を甲乙をまわて鉤ハ知るなり。此鉤おく
則手前より向ハ低さを知るなり

量地指南後篇巻之四終

中山家蔵書印